

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：25301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K19281

研究課題名（和文）メンタルヘルス支援を目的とした多様性と共生社会について学ぶ教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of an educational program on diversity for the purpose of mental health support

研究代表者

井上 幸子（Inoue, Sachiko）

岡山県立大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：90747528

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：外国から移住した家族の子どもの学校での困難感には、言語に関するものでは、コミュニケーションの困難、対人関係構築の困難、学業上の困難が特定され、さらに差別や仲間はずれの体験、被いじめに関する困難が特定された。性的対象者を対象とした調査では、学校での困難感として自分のアイデンティティを守ること、本当の自分を表現できないこと、差別や虐待を感じることをテーマが特定された。自分らしさの表現ができないことを苦痛に感じる一方で、自分らしさやアイデンティティを守ろうとする反応として困難を感じていることが推察された。外国人を対象とした調査同様、少数者は差別や虐待といった困難な体験に関連すること明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、外国人を対象に子どもが多くの時間を過ごす学校生活での困難感に焦点をあて、母国語で自由記述の調査を実施し、日本語では十分に伝えられなかった困難感の具体的なテーマを特定した。また成人の性的少数者に対する調査では、子どもの時には表現が難しかった困難についても回想により回答する自由記述の調査を実施し、学校生活での困難について明らかにした。すでに学校では移民や性的少数者に対してさまざまな支援が取り入れられているが、どのようなことに困難を感じているのかの具体的な内容を明らかにすることで、さらなる支援策や人権教育をより実情にあった内容にすることができる。

研究成果の概要（英文）：The children of immigrant families from abroad were identified as having difficulties at school in terms of language: communication difficulties, difficulties in building interpersonal relationships, and academic difficulties were identified, as well as difficulties related to experiences of discrimination and ostracism, and being bullied. In the survey of sexual subjects, the themes of protecting one's identity, not being able to express one's true self, and feeling discriminated against or abused were identified as difficulties at school. It was inferred that while the inability to express one's true self was distressing, the difficulties were felt as a reaction to trying to protect one's identity and identity. As in the studies with foreign nationals, minorities were found to be associated with difficult experiences such as discrimination and abuse.

研究分野：精神看護学

キーワード：マイノリティ 外国人 性的少数者

1. 研究開始当初の背景

本研究は、小中学生年代の子どもが体験するメンタルヘルスの問題やマイノリティーに関わる困難感に焦点を当て、困難な体験の内容を明らかにし、支援の方策を検討することである。特に小中学生の学校生活の場では、地域の保健師や看護師などの保健医療職が直接的に支援しづらく、学校での困難感に伴う心身の不調が生じている場合においても関わりが難しい場合がある。学校ではさまざまな取り組みにより、インCLUSIVEな学校環境づくりが推進されているが、当事者は学校での困難を表現できない場合もあり、ニーズに合致した対策を取り入れるためには具体的な困難を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

小中学生年代のこどもは、人格形成期にありアイデンティティを確立する途上にある。この年代は多くの時間を小学校、中学校で過ごしており、家庭での生活に加えて、学校での生活や対人関係がその後の心身の成長に大きな影響を及ぼしている。外国から移住してまもない家族の子どもや LGBTQ などの性的少数者は、学校生活の場では少数者となり自分自身を表現することや、周囲から受容される体験が十分にできていないことが考えられる。そのような状況でどのような困難な体験をしているのかについて本研究で明らかにし、支援について考察することを目的に実施した。

3. 研究の方法

調査は3回に分けて実施した。一つ目の調査(調査1)と二つ目の調査(調査2)は外国から日本に移住して生活している方でお子様が日本の小中学校に通っているあるいは通った経験がある方を対象に、お子様の学校での経験について回答してもらう方法で調査した。三つ目の調査(調査3)は、性的少数者で成人を対象に、小中学生のときの経験を回想し回答してもらう方法で調査した。

まず調査1では、一カ国に限定して日本に移住し生活している家族の親を対象に、無記名自記式オンライン調査を実施した。対象者はネパールから移住したネパール語と英語を主に使用言語とする方で、ネパール語、英語が母国語であるネパール国籍の研究協力者を介して機縁法でリクルートし、オンライン調査への回答を依頼した。オンライン調査の質問項目には、小学校や中学校での生活で困難だと感じた経験や場面をオンラインフォームへ自由記述で回答する内容を含んでいる。最終的に10名から回答を得られ、自由記述の内容を質的に分析した。

調査2では、調査1で対象としたネパール以外の三カ国から日本に移住して生活している家族を対象に調査を実施した。ベトナム、フィリピン、韓国は日本への移住者の上位を占める国であり、日本で子育てをしている家族も多い。子どもが小中学校に通っている親に研究協力を依頼し、子どもの学校での困難な体験について親から回答を得る方法で調査を実施した。調査は、リクルートから調査票の配布に関する作業を調査会社を通して実施した。調査票の作成は研究者が日本語でまず作成し、ベトナム語、タガログ語または英語、韓国語のそれぞれの言語の翻訳業を専門としている翻訳者に依頼し翻訳された調査票を準備した。翻訳の際にはバックトランスレーションを複数回実施し、また複数の翻訳者が日本語との整合性を確認したものを使用した。調査1と同様にオンラインフォームへの自記式の自由記述による調査としたが、インタビューによる半構造化面接のように意味を確認するなどの質的なアプローチを可能とするため、回答を研究者が確認したあとに、記述内容をさらに確認する必要があると判断した内容については調査会社を通じて記述内容に関する質問を対象者に伝え、追加の説明を加えて回答してもらった。研究者は個人情報は一切収集しないで、基本属性を含む質問への回答のみ収集した。自由記述の内容について、質的に分析した。

調査3では、性的少数者の方の小中学校での経験と意思について、調査時点で成人である方を対象に特に学校生活での困難感に焦点をあてて質問した。調査は、匿名でプライバシー情報を開示していない方に対してリクルートできるように、調査会社に登録している方の中から LGBTQ に該当すると自認している方に回答を依頼する方法で研究協力者を募集した。年齢、性別、性自認、性志向などの基本属性と、困難な体験に関する自由記述式の質問をひとつ尋ねた。個人情報は収集せず、オンラインフォームで回答を得た。自由記述の回答について質的に分析した。

本研究は、岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した。調査協力は任意であること、個人情報収集しないこと、匿名のため回答を回収したあとは同意の撤回はできないが、回答するまではいつでも研究参加をとりやめることができることについて、文書で説明した。日本語以外の言語で実施する調査については、説明文書を当該言語で作成し、また当該言語でのコミュニケーションが可能な協力者によってリクルートの際に口頭でも説明した。

4. 研究成果

1) 調査1 ネパールから移住した子どもの困難感に関する調査

調査1では、主題を分析する過程において、以下の主要な概念が明らかになった。両親によって表現された移民の子どもである児童生徒の経験は、4つのテーマで特定された。(1) 交流と相互関係：言葉の壁、友達作り、仲間や教師との関わりに関するもの。(2) 学校での違和感と食事：文化、食事や表現などの日常生活パターンに関するもの。(3) 学業上の排除：家庭での援助・復習の欠如に関するもの。(4) 精神的苦痛、仲間はずれ、いじめ：適応・順応、悲しみ、内気、怖さ、不幸、いじめに関するもの、であった。

交流と相互関係では、日本の学校環境における移民の子どもたちの最も共通する課題は言葉の問題であった。ほとんどのネパール人生徒が、日本語での完全な表現、コミュニケーションができず、友人関係を築くことができないという経験をしていた。そのため、人間関係を築くことに対して困難を感じていた。彼らは仲間集団に入ることが難しく、その結果、排除感や無関心感、あるいは孤立感を抱いていた。

学校での違和感と食事に関しては、それぞれの家庭での価値観や生活パターンが、教室や校庭で突然問われることになり、子どもたちはそのような場面で違和感を抱いていた。最も大変だったのは学校での食事、給食で、食べ物や料理、調理方法、味に対することだけでなく、食器、特にスプーンや手で食べるのが一般的な食べ方ではなく、箸を使うことなどがまったく違う習慣であることに起因していた。これは、子どもだけでなく、親も同じような問題を抱えていると回答していた。ある親は、言葉、文化、日々の生活スタイル、食べ物や食事の習慣、その他多くの違いから適応することが難しく、子どもの全体的な発達にも影響を与えていると回答していた。

学業上の排除・家庭での援助・復習の欠如のテーマが特定された。ほとんどすべての回答者が、日本語が主な問題であると回答した。この状況について、小学生の母親は「日本の教育システムはとても良いと感じました。私たちの国の学校と比べると、日本の学校は機会も施設も豊富で、環境もとてもきれいで、子どもの全人的な発達を促す遊びの教材やスケジュールも整っています。しかし、言葉の問題で、子どもたちは私たちよりも早く理解できると思っていますが、私たち親は家庭で子どもの教育を手助けしたり、サポートしたりすることができないのです。」と表現していた。同様に、小学生の子どもを持つ父親は、娘の宿題を手伝ったり、復習を手伝ったりすることができないと述べていた。言語による困難は、人間関係の構築を阻害するだけでなく、学業達成にも影響していた。

精神的苦痛、仲間はずれ、いじめに関しては、次のような親の表現から特定された。恐怖心、内気さ、人と一緒にいられない(仲間の輪に入れない)、学校で不幸を感じる、などが子どもの心理的・感情的側面として親により明らかにされた。ある小学生の親は「うちの子はよく目に涙をためていました。子どもは先生とネパール語で話すのですが、先生は何を言っているのか理解できません。(中略)学校に適応したり、学校で楽しく過ごしたりするのは難しいようです。」と述べていた。いじめられたり、否定的な仲間関係を持ったり、仲間はずれにされ孤立することは、子どもたちに悪影響を及ぼしかねない。この調査では、子どもの様子から、親が自分のこどもはいじめられていると感じた経験があったことを回答していた。学校ではいじめへの対処は十分に取られているが、言語や表現の違いでコミュニケーションに困難が生じ、現状を伝えたり理解したりすることが十分にできていない可能性があることも考えられる。

2) 調査2 フィリピン、ベトナム、韓国から移住した子どもの困難感に関する調査

調査2では、移民の子どもたちの体験について分析した。対象者は、フィリピンからの移民5名、ベトナムからの移民5名、韓国からの移民5名の合計15名であった。親が表現した子どもの体験は多様であった。主題分析の結果、相互に関連する5つのテーマが明らかになった。(1) コミュニケーション、自己表現、学習ペース維持における言葉の壁、(2) 友情、対人関係、社会的つながり、文化的統合、(3) いじめ、差別、(4) 教師のケアとサポート、

(5) 母国の教育制度や学校環境との比較である。

コミュニケーション、自己表現、学習ペース維持における言葉の壁のテーマでは、ほとんどの子どもたちが、入学時に言葉の問題を経験していた。「小学校入学時は日本語が話せなかったが、1年間の学校生活で日本語が得意になり、友達との関係も良好になった」と述べているように、日本語が得意になることで友人関係が発展したと回答している。対人関係において言語習得の影響は大きい。友人や教師との関係において言葉が通じないと、自分の苦しみや伝えたいことをうまく表現できず傷つく経験をしていた。

また、学業においても言葉の壁を困難としてあげていた。たとえば、「子どもだけでなく、親も大変です。先生と話せない、シートや指示が読めない、漢字や文法の授業が難しい、授業に参加できない。日本語は上達したが、理科や算数の問題は日本語で表現された用語がわからずまだ難しい。日本で生まれ、幼い頃から日本で生活している場合はこの問題は大幅に軽減される可能性があるが、そうでない場合は学業上の大きな困難が生じている場合がある。

友情、対人関係、社会的つながり、文化的統合のテーマでは、特に子どもたちは満足はいく友人関係や社会的つながりを築くのに苦労したと回答している。親しい友達がいなかった子どもに親が理由を尋ねると、たくさんの友だちが自分のことを嫌っていると話したと回答した。さらに文化の違いは、親同士の関係や子どもへの接し方にも反映されていた。親同士が顔見知りの場合、子ども同士が遊びやすいということがあがるが、そのような親同士の関係も築くことが難しく、子ども同士の関係に影響していた。またそのような関係を築きにくい場合でも、母国では教師が間に入るだけでなく、観察し、察知することもあるが、日本の子どもたちは、自信を持って好きなことをするように勧められることが多く、そのような教育方針のなかで教師は子どもたちの個人的なことに干渉しないことが多いと捉えられていた。一方で、日本で生まれた子どもについて、親たちはポジティブな経験を回答した。転校しても大きな影響はなかったことで、日本で生まれ育つことによりこれらの困難は生じる可能性が少ないのかもしれない。日本の言葉や文化を知っているため、クラスメイトや先生との交流も容易で、学業やその他の課外活動に関しても問題はなかったことから、日本で生まれ育つことには利点があると述べていた。

いじめ、差別では、一部の親は外国人の子どもはいじめに直面していると捉えていた。子ども同士のいじめや差別だけでなく、親の心配や差別の表現が頻繁に見られたと捉えていた。たとえば、「日本人の子どもとの友達、その本人に悪意はなかったと思うが、周囲に流されて反応していたのではないかと捉えられるような状況もあった。」と回答している。差別の辛い体験の中には、クラスメイトが自分の子どもの外国人の名前に対してからかいやいじめを受けたと捉えているものもあった。

教師のケアとサポートに関して、ほとんどの保護者は、教師の対応、姿勢を高く評価していた。学校では、言葉やコミュニケーションの難しさが問題となっているが、保護者は教師のサポートや励ましに満足していた。保護者は、新しい環境に適応するためのバイリンガルサポートやオリエンテーションを望んでいた。また、差別用語を使わないようにする教育には、ネイティブの子どもたちへのオリエンテーションや説明が有効であると感じていた。小学校入学時に、学校生活を共にする外国人の友だちや多文化家庭の友だちに慣れるような説明や、差別的な言葉を使わないように注意することが必要であると述べていた。このような内容は現代の教育環境では人権教育として普及しているが、入学時や転校時に伝えてほしいという希望があった。

母国の教育制度や学校環境との比較では、対象者は、日本人はルールに厳格であることを特記した。学校の遠足では、子どもたち同士で食べ物を分けてはいけない、自分の持ってきたものしか食べてはいけないと指導があったり、ランドセルに関する厳しい規則があったことをあげている。これについて、日本の教育は、個人の個性を尊重せず、みんなが同じものを追い求めているような印象を受けたと表現していた。個人情報の取り扱いに対しても、日本は厳重にあつており、母国との違いに驚くと同時にクラスメイトの保護者に気軽に連絡がとれないことなどを困難に感じている場合があった。日本の教育システムについては肯定的な意見も多かったが、外国人の子どもたちが自分らしくいることができ、自分たちの文化や個性、アイデンティティを表現できる場が限られていることや、英語のカリキュラムとグローバル・シチズンシップの準備が非常に限られていることを懸念していた。

3)調査 3 性的少数者の学校での困難感に関する調査

調査 3 では、248 名の参加者からデータを収集した。参加者の基本属性を表 1 に示している。参加者の平均年齢は 31.5 歳で、最も多かったのは 18~20 歳 (n=136)、次いで 30~39 歳 (n=76)、40 歳以上 (n=36) であった。内容分析からは 3 つのテーマが抽出された：自分のアイデンティティを守ること、本当の自分を表現できないこと、差別や虐待を感じることである。

自分のアイデンティティを守るについて、このテーマは「女性が男性を好きだと思い込んでいるガールズトークについていけない」、「ガールズトークの輪の中にいるのが苦痛だったが、周りに合わせなければならなかった」、「男性ではなく女性に興味があった」、「アセクシュアルなので恋愛に興味がない」といった回答から特定された。本当の自分を隠さなければならないことへの不快感や苦痛を訴える回答者が多かった。たとえば、「自分の性自認や性的指向がバレないように適応しなければならないのは苦痛だった」といった内容である。また、ファッションに関する話題で仲間とコミュニケーションをとることの難しさも経験していた。「ショートカットの髪型でカッコいい服を着るのが好きなので、好んでそうしているが、「なぜ?」と聞かれる、「フェミニンな髪型や服を着て馴染みたくないのに、周りからいろいろ言われる」と、ファッションに対する周囲の反応に違和感を感じていた。これらの違和感は、自分のアイデンティティを守るために感じた違和感であると考えられた。

本当の自分を表現できないことのテーマは、参加者が本当の自分だと感じていることを明らかにすることの問題に関連している。これは時に、自己の一面をさらけ出さなければならないことへの隠蔽や後悔といった状況を伴っていた。「恋愛や異性の話題になると、自分の正直な気持ちを表現できないと感じた。自分の気持ちを隠さなければならないと感じた」、「男女両方が好きだと人に話したら、好奇心を持たれて質問されたり、距離を置かれるようになり、言わなければよかったと思った」などが具体的に述べられた内容であった。時には、学校環境の側面が、自己と仲間との間の不協和の感覚を促すこともあったとして、「保健体育では、異性に興味を持つ時期だと教えられる」など例として挙げられる。異性についての会話では、回答者は、自分が異性に興味がない(あるいは興味があるだけではないほかの要素も含むことがある)ことを明かすと不利になると感じ、自分の本当の好みを表現できなかったと述べていた。周囲に合わせなければならないこともさらに苦痛を増強させたと報告している。対象は、学校の制服や更衣室の利用、性別情報の記入など、自分の性別を意識させられる体験や、物や場所が男子用、女子用とはっきり分けられている環境、性別が区別されているものを使わなければならない体験について苦痛を感じていた。

差別と虐待の感情のテーマの特徴は、差別とスティグマの経験で表される。ある対象者は、学校でいじめやからかいの標的にされ、仲間はずれにされ、無視され、さまざまな言葉で中傷され、同性を好きであることをバカにされたという経験を述べていた。料理が得意なことや、口下手な性格をバカにされたなど、性別に対する固定観念をもとにした価値観で接する友人に対して悲しさや虚しさの感情を抱いていた。また、「メディアでは様々な性的指向に対する差別が多かったので、自分がおかしいと思って辛かった」という回答もあった。対象者の傷ついた経験は、親しい友人関係の中での差別の結果とも捉えられ、さらには社会的な固定観念も反映していた。

4)まとめ

外国から移住した家族の子どもたちの学校での困難感は、次のものが挙げられた。調査 1 では (1)交流と相互関係：言葉の壁、友達作り、仲間や教師との関わりに関するもの。(2)学校での違和感と食事：文化、食事や表現などの日常生活パターンに関するもの、(3)学業上の排除：家庭での援助・復習の欠如に関するもの、(4)精神的苦痛、仲間はずれ、いじめ、調査 2 では(1)コミュニケーション、自己表現、学習ペース維持における言葉の壁、(2)友情、対人関係、社会的つながり、文化的統合、(3)いじめ、差別、(4)教師のケアとサポート、(5)母国の教育制度や学校環境との比較であった。言語に関することでは、コミュニケーションの困難、対人関係構築の困難、学業上の困難が特定され、さらに差別や仲間はずれの体験、被いじめに関する困難が特定された。性的対象者を対象とした調査 3 では、学校での困難感として(1)自分のアイデンティティを守ること、(2)本当の自分を表現できないこと、(3)差別や虐待を感じることをテーマが特定された。自分らしさの表現ができないことを苦痛に感じる一方で、自分らしさやアイデンティティを守ろうとする反応として困難を感じていることが推察された。外国人を対象とした調査同様、少数者は差別や虐待といった困難な体験に関連することも推察された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Ratna Shila Banstola, Sachiko Inoue	4. 巻 9
2. 論文標題 Difficulties in Adapting at School Among Nepalese Immigrant Children in Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 SAGE Open Nursing	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/23779608231173288	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Sachiko Inoue	4. 巻 TBA
2. 論文標題 Experiences and Mental Health Status of Sexual Minorities in Schools in Japan	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Journal of Immigrant and Minority Health	6. 最初と最後の頁 TBA
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------